HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

| | |
|---|---|
| タイトル | トレンガヌ州オランアスリ集落における地域開発とその影響に関する生態人類学的研究(退職記念) |
| 著者 | 須田，一弘 |
| 引用 | 北海学園大学人文論集，42：161-184 |
| 発行日 | 2009-03-25 |

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

# トレンガヌ州オランアスリ集落における地域開発とその影響に関する生態人類学的研究

須　田　一　弘

## 1．はじめに

オランアスリ（Orang Asli）とは，半島部マレーシアに居住する人口約15万人の先住諸民族の総称である。オランアスリとは，マレー語の「人(Orang)」と「本来の，元来の（Asli)」を合わせたもので，先住民を意味する。本稿では，熱帯湿潤環境に暮らす人間集団の適応メカニズムを理解することの一環として，また，地域開発によって引き起こされた急激な社会変化にこれらの集団がどのように対応しているかを理解するため，マレーシアトレンガヌ州の二つのオランアスリ集落を対象に，生業活動，現金収入，時間利用パターンに焦点をあてて，それらの変化について分析する[1)]。対象となる二つのオランアスリ集落(スンガイブロア村とスンガイサヤップ村[2)])は，いずれも，後述するマレーシア政府の再居住計画によって設立された定住集落であるが(図１)，スンガイブロア村はその生計を森林産物の採集に大きく依存しているのに対し，スンガイサヤップ村はアブラヤシプランテーションなどの開発に大きく依存した生活を送っている。

ここ数年間で，両集落の社会経済的状況は少なからず変化している。スンガイブロア村の主要な変化は，二つの新しい道路の建設によってもたらされた。一つは，近隣のマレー人村落であるタパ村からスンガイブロア村を通って,東南アジア最大の人造湖であるクンニャー湖へ至る道路であり，もう一つは，クンニャー湖北岸を回って，トレンガヌ川上流地域の中心地であるクアラブラン市とクランタン州内陸部の中心地であるグアムサン市を結ぶ道路である。前者はスンガイブロア村のオランアスリと，政府役人，

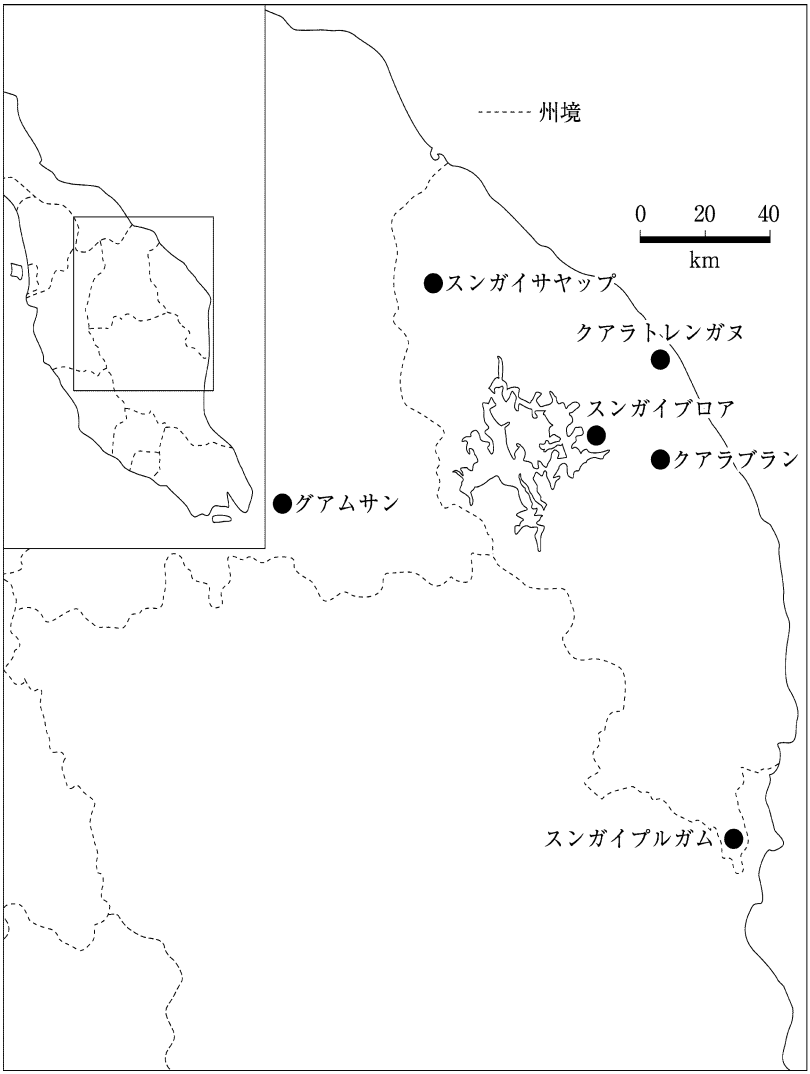


**図 1　調査地**

香木や籐の仲買人，食料や生活必需品を商う行商人等との頻繁な接触をもたらした。また，後者は，オランアスリの活動域を拡大させ，クランタン州のオランアスリ集落への往来を容易なものとした。その結果，スンガイ

ブロアのオランアスリは，しばしば，クランタン州のクアラコー居留地のオランアスリと一緒に香木採集やインドシナオオスッポン漁を行うようになった。

いっぽう，スンガイサヤップ村の社会経済的変化は開発のサイクルによって引き起こされた。1970 年代に植林されたゴム林が老木となり，樹液の生産が減少したため，2007 年の 7 月にすべて伐採され，12 月に新たな苗木が植林された。そのため，スンガイサヤップのオランアスリは，若木から樹液を採取する事ができるようになるまでのおよそ 5 年間は，樹液採取という現金収入源を失うことになった。さらに，アブラヤシが生長し樹高が高くなったため，オランアスリによる果実採集が困難になった。また，アブラヤシの生長に伴い，農薬や除草剤の散布回数が減ったため，これまで重要な現金収入源であった維持管理作業が大幅に減った。

以下では，オランアスリの概略を述べた後，両集落に社会変化をもたらした地域開発とそれへの対応を，生業活動に焦点をあてて考察する。

## 2．オランアスリ

現在，オランアスリの人々は，政府機関であるオランアスリ局（JHEOA：Jabatan Hal Ehwal Orang Asli）の管轄のもとに生活している。経済活動や学術調査を含め，オランアスリと何らかの接触をする場合には，原則としてオランアスリ局の許可が必要となる。

オランアスリ諸民族は，言語，生業，身体的特徴などから，伝統的に三つの民族グループに分類されてきた（Skeat and Blagden, 1906；Williams-Hunt, 1952；Carey, 1976；口蔵，1997）。このうち，タイ南部からマレーシア北部の森林地帯に暮らす集団はネグリト（Negrito）と呼ばれ，かつてはきわめて移動性の高い生活をおくり，狩猟採集，交易用森林産物（籐，樹脂，香木など）の採集を行っていた。言語はオーストロアジア語族モン・クメール語系に属しており，縮毛，黒褐色の濃い皮膚色を特徴とする。つぎに，半島部マレーシア北部から中央部にかけての山岳地帯に住む集団は

セノイ(Senoi)と呼ばれ，焼畑農耕や狩猟，魚毒漁などを生業としてきた。言語は，ネグリトと同じくオーストロアジア語族モン・クメール語系に属するが，波状毛や，やや薄い皮膚色といった身体的特徴がネグリトと異なる。半島部マレーシア南部の内陸や海岸線に住むグループは，「本来のマレー人」を意味するムラユアスリ（Melayu Asli）と呼ばれ，言語的にはマレー語と同じオーストロネシア語族に属し，身体的特徴もマレー人とほとんど変わらず，直毛とさらにうすい皮膚色が特徴とされる。内陸部に住むムラユアスリは焼畑農耕や交易用森林産物で生計を立ててきたが，海岸線に住む集団は，漁労を生業の中心としている。ムラユアスリがオランアスリに分類されるのは，主として彼らの非ムスリム性によっている[3)]。しかし，マレーシア独立以前からムスリム化していたのに，貧困を理由にオランアスリに分類された集団もある（信田，2004：p 30）。ただし，こうした分類は，かつての英国植民地政府や独立後のマレーシア政府，および研究者によってなされたものであり，彼ら自身にネグリトやセノイ，ムラユアスリという民族意識があったわけではない。

以上のように，言語的，経済的，身体的特徴に多様性を見せる諸民族（JHEOA の分類では 18 民族）が，現在ではオランアスリというカテゴリーに一括して分類されている。これは，マレーシアの多数民族であるマレー人との対比の中で形成されてきた概念であり，正式には 1966 年にマレーシア政府によって公的に使用されるようになった（Dentan et al., 1997）。オランアスリの人々が，自分たちをオランアスリとして意識するようになったのはごく最近のことである。

マレーシア政府のオランアスリ政策は，英国植民地時代から続いた保護・隔離政策から統合政策へと転換した。そのきっかけは，1948 年のマラヤ共産党の武装蜂起に対して発令された非常事態宣言と，その後 12 年間続いた非常事態宣言期である。この時期，植民地政府は，森林地帯をベースにしていたマラヤ共産党の影響を排除するため，オランアスリの人々を強制的に移住させ，共産ゲリラとのつながりを断ち切ろうとした。さらに，1969 年のマレー人と華人との暴動の後に，華人との経済格差を是正するた

め，マレー人を優遇する「ブミプトラ政策」が実施され，次第にオランアスリのマレー人への同化政策がとられるようになった。1970 年代に入ると，オランアスリ局は，マレー人への同化を進めるため，オランアスリを取り込んだ経済開発プロジェクトを立案し，複数のオランアスリ集落を集住させることが多い「再居住計画」を実施した。本稿が対象とするトレンガヌ州の二つのオランアスリ集落は，いずれも 1970 年代にマレーシア政府による再居住政策のもとに設立されたものである。さらに，イスラーム復興運動が盛んになると，イスラーム化を伴うマレー化としての同化政策が加わった（信田，1999；2004）。

ただし，遊動的な狩猟採集民や焼畑農耕民というイメージが強いオランアスリに対し，マレーシア政府は土地の所有権を十分には認めず，政府主導の開発プロジェクト（大規模プランテーション，ダム建設，高速道路，大学等の政府機関建設，空港建設，リゾート開発など）が実施されると，少額な補償金を支払い，半ば強制的に移動を強いている（Dentan et al., 1997）。たしかに，かつてオランアスリの人々の多くは，狩猟採集や焼畑農耕に従事していたが，これらの開発による森林環境の変化，農業開発政策や移住政策などにより，ゴムの樹液採取，アブラヤシプランテーションでの労働，日雇い労働に従事するなど，その生活を大きく変化させている。環境や生業活動の変化による不適応の結果としての貧困化，マレー人などの周囲の者たちからの差別，不十分な土地所有に象徴される法的・政治的権利の制限など，現在，オランアスリの人々は様々な問題を抱えている（信田，2004：p 33）。

以下では，半島部マレーシア東海岸に位置するトレンガヌ州の二つの集落を取り上げ，近年におけるオランアスリの生活の変化を具体的に検証してゆく。トレンガヌ州は，半島部マレーシアの東海岸沿いにほぼ南北に細長く伸びる，マレーシア 13 州のうちの 1 州である。西をクランタン州，南をパハン州と接している。西側の州境付近は山岳地帯になっており，この地域を生活域として利用していたオランアスリの人々もいた。しかし，山岳地帯の多くはクランタン，パハン両州に含まれており，再居住計画によっ

て設立された集落のほとんども，この両州に属している。トレンガヌ州にあるオランアスリ集落はわずかに3カ所であり，州の全人口約120万人のうち，わずかに約700人を占めるにすぎない。本稿では，このうち，中央部のスンガイブロア村と北部のスンガイサヤップ村を取り上げるが，南部のパハン州境に近いスンガイプルガム村は，両集落より規模が大きく，政府の経済発展プロジェクトにもより積極的に関わっているという（Ramle, 1993）。

## 3．スンガイブロア村

スンガイブロア村は，トレンガヌ川上流地域の中心都市であるクアラブラン市の西およそ13 kmに位置し，オランアスリ局によって，オランアスリの生活改善のための再居住計画の一環として1977年に設立された。再居住計画はオランアスリへの医療サービス，教育，村落開発の提供を目的としていた。現在，スンガイブロア村にはオランアスリのうち，セノイに分類されるスマッ・ブリとネグリトに分類されるバテッ・デの2集団が共住している。集落の西北西約4 kmにはマレー人村落であるタパ村があり，スンガイブロア村とは舗装道路で結ばれている。

集落及びその周囲の土地はオランアスリ局が管理するオランアスリ保護地区となっているが，そのほとんどは，現在，連邦土地整理再生公社（FELCRA：Federal Land Consolidation and Rehabilitation Authority，以下FELCRA）によって開かれた広大なアブラヤシ農園になっている。アブラヤシ農園の面積は59.73 haで，スンガイブロア村の開発のため1993年にオランアスリ保護地区を切り開いたものであり，村人は純益から毎年成人一人あたりおよそ200〜300リンギッ（2007年当時約6,500〜10,000円）の分配金を受け取っている。

集落には政府が提供した60戸のブロック作りの家屋があり，およそ300人が暮らしている。集落内には小学校，幼稚園，モスク，医療施設と2戸の政府役人住宅がある（写真1）。村には連邦政府のオランアスリ局と州宗

**写真１　スンガイブロア村**

教局の役人がそれぞれ常駐し，日常生活や宗教活動に関してオランアスリに助言を行っている。このうち宗教局の役人とその妻は，住宅で食料品や生活必需品を販売する商店を経営している。

村人は，かつては食料の多くを狩猟や採集で森林から得ていた（Kuchikura, 1987）。しかし，活動域の多くが，クンニャーダムの建設により水没してしまったことにより，次第に購入食料の割合が増加していった。これらの食料は，前述の役人の経営する商店や，村にバイクや自動車でやってくる行商人から購入することが多い。

**〈現金獲得活動〉**

2002 年の主な現金獲得活動は，籐，香木の採集とインドシナオオスッポン漁であり，クンニャー湖周辺に残る熱帯林が利用されていた。採集グループは成人男性のみで構成され，船外機付きのボートで湖を渡り，採集場所へ向かっていた。妻や子供は，子供の小学校への通学の必要性，船外機エンジンのコスト高のため村に残っていた。

採集活動，とくに香木採集に関する 2002 年と 2007 年の際だった差異は，活動域の変化である。クアラブランとクランタン州のグアムサンを結ぶ道路の開通により，船外機付きボートではなく自動車を利用して容易，かつ低コストでクンニャー湖北岸にアクセスできるようになった（写真２）。ク

**写真 2　新たな道路を利用し，クンニャー湖北岸で香木採集に出かけるグループ**

ンニャー湖北岸はそれまであまり利用してこなかった場所であり，2007 年に採集された香木の量は 2002 年をはるかにしのぐ。これらの採集グループは若年及び成人男性によって構成されており，基本的生産単位が伝統的な核家族から男性のみのグループに変化したことが伺える（Kuchikura, 1987)。

また，2007 年には村人は，重い荷を担がなければならない籐採集よりも，香木採集を好むようになった。2002 年には籐採集が最も重要な現金収入源であり，全収入の 55.8％を占めていたが，2007 年では，若者が集落近くの場所を利用した日帰りの籐採集を行うに過ぎなかった。籐採集が減少したもう一つの理由として，クアラブランに住む華人の籐仲買人がその仕事から撤退したこともあげられる（写真 3 )。

もう一つの新たな傾向は，華人仲買人への販売を目的としたインドシナオオスッポン漁が活発化したことである(写真 4 )。これまで，インドシナオオスッポン漁は，他の活動の合間に行われるに過ぎなかったが，2002 年以降には，何人かの若者によって，籐や香木の採集といった他の活動を全く行わずに，インドシナオオスッポン漁のみを目的として森に入ることが行われるようになった。彼らは，村を遠く離れたクンニャー湖畔にキャンプして獲物を探したり，村から比較的近い場所での日帰り漁を行ったりす

**写真 3　道路に集められた籐**

**写真 4　捕獲されたインドシナオオスッポン**

るようになった。さらに，2007 年には，自動車でクランタン州へ出かけ，バテッ・デの集落があるクアラコー周辺やルビル川上流で漁を行うようになった。

2000 年から 2002 年までの集落における成人男女の現金及び食物獲得活動をみると(表１)，森林伐採労働者のための仮住居建設作業が一段落したため，男性の賃労働の頻度が低下したことがわかる (15.2%から 3.8%)。また，籐と香木採集，インドシナオオスッポン漁，薬草や果実採集といった森林産物の採集は 1.3%から 11.3%へと増加している。

いっぽう，食物獲得活動は 2002 年には，男性は 1.1%から 8.8%，女性

**表 1　スンガイブロア村の男女別の一人当たり生業活動従事日数**

| 活動 | 男 | | | | 女 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 2000/2001 | | 2002 | | 2000/2001 | | 2002 | |
| | 人日 | % | 人日 | % | 人日 | % | 人日 | % |
| 生業活動なし | 875 | 82.4 | 362 | 76.1 | 1455 | 97.2 | 565 | 82.3 |
| 現金獲得活動： | | | | | | | | |
| 森林伐採労働者のための住居建設作業 | 115 | 10.8 | — | — | — | — | — | — |
| アブラヤシ農園での賃労働 | 46 | 4.4 | 18 | 3.8 | 26 | 1.7 | 4 | 0.6 |
| 籐採集 | 14 | 1.3 | — | — | — | — | — | — |
| 香木採集 | — | — | 13 | 2.7 | — | — | 8 | 1.2 |
| スッポン漁 | — | — | 37 | 7.8 | — | — | — | — |
| 薬草及び果実採集 | — | — | 4 | 0.8 | — | — | — | — |
| 小計 | 175 | 16.5 | 72 | 15.1 | 26 | 1.7 | 12 | 1.8 |
| 狩猟 | 3 | 0.2 | 16 | 3.4 | — | — | — | — |
| 漁労 | 4 | 0.4 | 15 | 3.1 | — | — | 78 | 11.4 |
| 採集及び収穫 | 5 | 0.5 | 5 | 1.0 | 17 | 1.1 | 31 | 4.5 |
| 果樹植え付け | — | — | 6 | 1.3 | — | — | — | — |
| 小計 | 12 | 1.1 | 42 | 8.8 | 17 | 1.1 | 109 | 15.9 |
| 合計 | 1062 | 100.0 | 476 | 100.0 | 1062 | 100.0 | 686 | 100.0 |

は 1.1%から 15.9%へと，ともに増加している。2000/2001 年には村人はほとんどの食料を購入し，食物獲得活動はまれにしか行わなかった。ほぼ毎日，行商人から魚や野菜，果実などの食材や調理済みの食料を購入していたのである。しかし，2002 年には行商人が村を訪れる回数が二，三日に一度に減少し，食料の購入が困難になった。この理由は，村人の購買力の低下にある。そのため，2002 年には村人は集落周辺で食料を採集するようになった。とくに女性の漁労と採集の頻度はそれぞれ 11.4%と 4.5%に増加した。

2007 年の時間利用に関する量的データの分析はまだ行ってはいないが，香木採集とインドシナオオスッポン漁のような現金獲得活動は増加していることが伺える。また，男女ともに食物獲得活動にはほとんど従事していない。2007 年の状況は，2000/2001 年，すなわち，食物のほとんどを購入するという状況に類似している。前述のように，村人は新たな道路を利用

して，比較的資源の豊富な場所で香木やインドシナオオスッポン漁を行うようになったため，購買力が増加したのだろう。さらに，新たな道路を通って，行商人が村を訪れる機会も増えたのである（写真５）。

前述のように，スンガイブロア村の周囲には広大なアブラヤシ農園が広がっているが，村人がアブラヤシ農園の作業に従事して現金を得ることはほとんどない。オランアスリ局及び FELCRA によるアブラヤシ農園の開発は，オランアスリをアブラヤシ農園での作業に従事させ，安定的な現金収入をもたらすことを目的としていたが，村人は開発へのコミットメントにはあまり積極的ではなく，籐や香木といった森林産物の採集やインドシナオオスッポン漁によって現金を得ることに多くの時間を費やしている。これは，スンガイプルガム村（Ramle, 1993）や次に紹介するスンガイサヤップ村とは大きく異なっている。

**写真５　村からクンニャー湖へ続く道**

## ４．スンガイサヤップ村

スンガイサヤップ村は 1974 年に再居住計画の一環として，オランアスリ局によって設立された（写真６）。スンガイサヤップ村の住民は，ネグリトに分類されるバテッ・テッに属しており，かつてはクランタン州ルビル川上流で遊動生活を送っていた。現在の集落に定住してすぐに，村人はオラ

**写真 6　スンガイサヤップ村**

ンアスリ局の勧めに従い，農耕を開始し，1976 年にはゴム産業小農開発公社（RISDA：Rubber Industry Smallholders Development Authority，以下 RISDA）の管理のもと現金収入源としてゴムを植林した（写真 7）。現在は，8.4 ha のゴム園を有している。また，1991 年には，FELCRA の管理のもとでアブラヤシ農園の開発を開始した。1992 年には 87 ha の面積にアブラヤシを植え，1995 年から収穫が始まった。集落の北東約 5 km のク

**写真 7　ゴム樹液採集**

ルアック村に，この地域のアブラヤシ農園を管理監督するFELCRA事務所が置かれている。

2002年の調査時には，村人はゴム園とアブラヤシ農園から現金収入を得ていた。村人は，時おりゴム樹から樹液を採取し，RISDAにそれを販売していた。アブラヤシ農園からは三種類の方法で現金収入を得ていた。一つはFELCRAからの分配金であり，ほぼ一年に一度，純益から成人男女にそれぞれ分配金が支払われた。また，除草剤や農薬の散布などの維持管理作業の請負も成人男性によって行われていた(写真8)。さらに，果実の収穫作業によっても日当を得ていた(写真9)。ところが，1976年に植えられたゴム林が，生産性の低下のために2007年7月に伐採された。伐採されたゴム木は材木として販売され，成人一人あたり2,000リンギッ（2007年当時約66,000円）の分配金を受け取った。また，2007年12月から新たにゴムの苗木を植林したが，ゴム樹液の採取が可能になるのは，植林からおよそ5年後になる。さらに，生長につれアブラヤシの樹高が高くなり，除草剤の散布の回数が減ると同時に，果実採集も困難になっている。

村人は，現在の集落に定住すると同時に吹き矢猟をやめてしまったが，果実や薬草，香木の採集のため，現在でも森に入っている。また，周辺の河川で漁労も行っている。

2002年の調査時には6世帯26人(男性10人，女性16人)がスンガイサ

**写真8　アブラヤシへの農薬散布**

**写真9　アブラヤシの実の収穫**

ヤップ村に暮らしていた。その後，一人の老年男性と一人の若年女性が亡くなり，三人の男子が生まれている。

**〈スンガイサヤップ村の生業活動：時間利用のデータから〉**

時間利用のデータ収集は，村の中央で村人の出入りを観察する定点観察法によって行った(Suda, 1994)。2002年の調査は，8月11日から21日までの8日間に調査を行い，食物獲得活動と現金獲得活動を合わせた生業活動について，生業活動に参加するすべての村人を対象に，男性8,181分，女性1,848分のデータを収集した(Suda, 2007)。2007年には，同様に，7月と9月の3日間に，男性1,782分，女性1,720分のデータを収集した。

2002年では，平均的な成人男性は，一日に70分を漁労に，19分を果実採集に割り当てて食物を獲得する一方，15分をアブラヤシの維持管理作業に，34分をアブラヤシの果実採集に，22分をゴム樹液採取に，2分を農業に，25分を果実採集に，15分を屋根材用の椰子の葉採集にそれぞれ割り当て，現金収入を得ていることになる（表2）。同様に，女性は65分を果実採集に割り当て食物を獲得し，12分をゴム樹液採取に，17分を屋根材採集

**表 2　2002 年の男女別の一人当たり生業活動従事時間（分）**

| 活動 | 男性（n＝9） | | 女性（n＝8） | |
|---|---|---|---|---|
| | 8 日間合計 | 1 日当たり | 8 日間合計 | 1 日当たり |
| 食物獲得活動 | | | | |
| 漁撈 | 558 | 70 | － | － |
| 採集 | 154 | 19 | 521 | 65 |
| 合計 | 713 | 89 | 521 | 65 |
| 現金獲得活動 | | | | |
| アブラヤシ維持管理 | 122 | 15 | － | － |
| アブラヤシ収穫 | 273 | 34 | － | － |
| （アブラヤシ小計） | (395) | (49) | － | － |
| ゴム樹液採集 | 178 | 22 | 96 | 12 |
| 農耕（果実畑） | 17 | 2 | － | － |
| 採集（野生果実） | 200 | 25 | － | － |
| 採集（屋根葺用材） | 120 | 15 | 135 | 17 |
| 合計 | 909 | 114 | 231 | 29 |

にそれぞれ割り当て，現金収入を得ている。生業活動への時間配分は，男性が女性よりも際だって多い。男性の時間配分は，食物獲得活動では 1.37 倍，現金獲得活動では 4 倍ほど女性より多いのである。その結果，男性の生業活動に配分された時間は合計で女性の 2.16 倍になっている。活動のバリエーションも男性が女性より豊富である。男性はすべての活動に従事しているのに対し，女性は果実採集，ゴム樹液採取，屋根材採集の三つしか行っていない。このことは，生業活動に関して男女が異なる役割を担っていることを示唆している。しかし，男性がすべての活動に従事していることは，これが厳密な意味での性による分業ではなく，女性の活動のいくつかが制限されていることを示しているといえよう。

つぎに，年齢による生業活動への時間配分の差異を調べるため，調査対象者を婚姻前の若年層(2002 年には男性 4 人，女性 2 人：2007 年には男性 4 人，女性 1 人)，壮年層（両調査時とも男性 3 人，女性 3 人)，子供がすでに婚姻した老年層(2002 年には男性 2 人，女性 3 人：2007 年には男性 1 人，女性 3 人）の三グループに分け，男女それぞれの年齢層による時間配分を分析した。男性の年齢層別時間配分を見ると(表 3 )，二つの特徴が見

**表3　2002年の男性の年齢層別一人当たり生業活動従事時間（分）**

| 活動 | 若年（n＝4） | | 壮年（n＝3） | | 老年（n＝2） | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 8日間合計 | 1日当たり | 8日間合計 | 1日当たり | 8日間合計 | 1日当たり |
| 食物獲得活動 | | | | | | |
| 漁撈 | 600 | 75 | 738 | 92 | 205 | 26 |
| 採集 | － | － | － | － | 695 | 87 |
| 合計 | 600 | 75 | 738 | 92 | 900 | 113 |
| 現金獲得活動 | | | | | | |
| アブラヤシ維持管理 | 181 | 23 | 125 | 16 | － | － |
| アブラヤシ収穫 | 220 | 27 | 526 | 65 | － | － |
| (アブラヤシ小計) | (401) | (50) | (651) | (81) | － | － |
| ゴム樹液採集 | 126 | 16 | 28 | 4 | 505 | 63 |
| 農耕（果実畑） | － | － | 50 | 6 | － | － |
| 採集（野生果実） | － | － | 600 | 75 | － | － |
| 採集（屋根葺用材） | － | － | － | － | 540 | 68 |
| 合計 | 527 | 66 | 1,329 | 166 | 1,045 | 131 |

いだせる。ひとつは，男性若年層の現金獲得活動はアブラヤシの果実採集や維持管理作業などの新たな活動に集中しているが，男性老年層は森林産物の採集に多くの時間を費やしていることである。もうひとつは，男性壮年層はあらゆる活動に従事し，配分する時間も他の年齢層よりも多くなっていることである。こうした傾向は，男性壮年層が生業活動において主要な役割を担っていることを示唆している。また，このことは，開発へのコミットメントは年齢によって異なり，生業活動における役割も異なっているということを示唆している。

2002年の女性の年齢層別の時間配分を見ると(表4)，まず，女性老年層のみが現金獲得活動に従事していることがわかる。また，女性若年層と壮年層の生業活動への時間配分は極端に少ないことがわかる。女性壮年層の生業活動への時間配分の少なさは，育児との関連があるかもしれないが，いずれにせよ，スンガイサヤップ村では生業活動への女性のコミットメントが低いことがわかる。

2007年の男女別の生業活動への時間配分を見ると（表5)，2002年に比べて男女とも生業活動に割り当てる時間が減少していることがわかる。2007年の男性一人あたり一日あたりの食物獲得活動への時間配分（21分）

**表 4　2002 年の女性の年齢層別一人当たり生業活動従事時間（分）**

| 活動 | 若年（n＝2） | | 壮年（n＝3） | | 老年（n＝3） | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 8 日間合計 | 1 日当たり | 8 日間合計 | 1 日当たり | 8 日間合計 | 1 日当たり |
| 食物獲得活動 | | | | | | |
| 漁撈 | ― | ― | ― | ― | ― | ― |
| 採集 | 695 | 87 | 187 | 23 | 740 | 93 |
| 合計 | 695 | 87 | 187 | 23 | 740 | 93 |
| 現金獲得活動 | | | | | | |
| アブラヤシ維持管理 | ― | ― | ― | ― | ― | ― |
| アブラヤシ収穫 | ― | ― | ― | ― | ― | ― |
| （アブラヤシ小計） | ― | ― | ― | ― | ― | ― |
| ゴム樹液採集 | ― | ― | ― | ― | 257 | 32 |
| 農耕（果実畑） | ― | ― | ― | ― | ― | ― |
| 採集（野生果実） | ― | ― | ― | ― | ― | ― |
| 採集（屋根葺用材） | ― | ― | ― | ― | 360 | 45 |
| 合計 | ― | ― | ― | ― | 617 | 77 |

**表 5　2007 年の男女別の一人当たり生業活動従事時間（分）**

| 活動 | 男性（n＝8） | | 女性（n＝7） | |
|---|---|---|---|---|
| | 3 日間合計 | 1 日当たり | 3 日間合計 | 1 日当たり |
| 食物獲得活動 | | | | |
| 漁撈 | 64 | 21 | ― | ― |
| 採集 | ― | ― | ― | ― |
| 合計 | 64 | 21 | ― | ― |
| 現金獲得活動 | | | | |
| アブラヤシ維持管理 | ― | ― | ― | ― |
| アブラヤシ収穫 | ― | ― | ― | ― |
| （アブラヤシ小計） | ― | ― | ― | ― |
| ゴム樹液採集 | ― | ― | ― | ― |
| 植林（ゴム樹） | 215 | 72 | 246 | 82 |
| 採集（香木） | 315 | 105 | ― | ― |
| 採集（屋根葺用材） | ― | ― | ― | ― |
| 合計 | 530 | 177 | 246 | 82 |

は，2002 年のおよそ四分の一であり，2007 年の女性は食物獲得活動に全く時間を割り当てていなかった。

また，前述のように，ゴム樹液採取やアブラヤシ農園での賃労働の機会は失われたものの，現金獲得活動に割り当てる時間は男女とも増加してい

る。男性ではおよそ50%増加し，女性は2.5倍に増えている。具体的には，男性若年層及び壮年層が香木採集に従事し，また，老年夫婦が自分の畑にゴムを植林したことが，現金獲得活動への時間配分を増加させた要因である。このことは，その時々に利用できる経済機会を逃さないという経済戦略をよく表しているようにも思われる（Endicott, 1984)。

2007年の男性の年齢層別の時間配分を見ると(表6)，いずれの年齢層でも生業活動の種類が減少したことがわかる。壮年層は漁労と香木採集を行っているものの，若年層は香木採集のみを行い，老年層はゴムの植林だけに従事したに過ぎない。女性の年齢層別時間配分では(表7)，老年女性のみがゴム採集を行い，女性若年層と壮年層の生業活動への貢献は，2002年と同じく極端に低いものになっている。

上記の時間利用の分析は，スンガイサヤップ村で，性および年齢層により生業活動へのコミットメントが異なっていることを表している。男性は女性より多くの時間を生業活動に費やし,活動のバリエーションも幅広い。男性若年層および壮年層は新たな現金獲得活動に従事しているが，男性老年層は森林産物の採集という伝統的活動により多くの時間を費やしている。いっぽう，女性老年層は，現金獲得活動と食物獲得活動の両方に貢献

**表6　2007年の男性の年齢層別一人当たり生業活動従事時間（分）**

| 活動 | 若年（n=4） | | 壮年（n=3） | | 老年（n=1） | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 3日間合計 | 1日当たり | 3日間合計 | 1日当たり | 3日間合計 | 1日当たり |
| 食物獲得活動 | | | | | | |
| 漁撈 | − | − | 170 | 57 | − | − |
| 採集 | − | − | − | − | − | − |
| 合計 | − | − | 170 | 57 | − | − |
| 現金獲得活動 | | | | | | |
| アブラヤシ維持管理 | − | − | − | − | − | − |
| アブラヤシ収穫 | − | − | − | − | − | − |
| (アブラヤシ小計) | − | − | − | − | − | − |
| ゴム樹液採集 | − | − | − | − | − | − |
| 植林（ゴム樹） | − | − | − | − | 1,720 | 573 |
| 採集（香木） | 315 | 105 | 420 | 140 | − | − |
| 採集（屋根葺用材） | − | − | − | − | − | − |
| 合計 | 315 | 105 | 420 | 140 | 1,720 | 573 |

**表 7　2007 年の女性の年齢層別一人当たり生業活動従事時間（分）**

| 活動 | 若年（n＝1） | | 壮年（n＝3） | | 老年（n＝3） | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 3 日間合計 | 1 日当たり | 3 日間合計 | 1 日当たり | 3 日間合計 | 1 日当たり |
| 食物獲得活動 | | | | | | |
| 漁撈 | － | － | － | － | － | － |
| 採集 | － | － | － | － | － | － |
| 合計 | － | － | － | － | － | － |
| 現金獲得活動 | | | | | | |
| アブラヤシ維持管理 | － | － | － | － | － | － |
| アブラヤシ収穫 | － | － | － | － | － | － |
| （アブラヤシ小計） | － | － | － | － | － | － |
| ゴム樹液採集 | － | － | － | － | － | － |
| 植林（ゴム樹） | － | － | － | － | 573 | 191 |
| 採集（香木） | － | － | － | － | － | － |
| 採集（屋根葺用材） | － | － | － | － | － | － |
| 合計 | － | － | － | － | － | 191 |

しているが，若年層と壮年層は食物獲得活動をわずかに行うに過ぎない。

彼らの資源利用は，FELDRA によるアブラヤシ農園開発，RISDA によるゴム園開発により，おおきく変化したと考えられる。2002 年と 2007 年の時間利用の分析は，彼らの生業活動が，開発におおきく依存していることを示している。スンガイサヤップ村の成人は，ほぼ毎年 FELCRA から分配金として 2,000～3,000 リンギッ（2007 年当時約 66,000～10,000 円）を受け取る。また，2007 年には，伐採したゴム木の販売代金の分配金 2,000 リンギッを受け取った。村人はこれらの収入を生活必需品のみならず自動車やバイクの購入にも充てている。以上のことを考えると，彼らは，現金を得るために一生懸命働く必要がないともいえる。およそ 30 年間で，彼らの生活は自立的なものから開発に依存したものへと変化し，貨幣経済はより浸透してきている。彼らの食物の多くは，クルアックの商店で購入したものであり，森林から食物を手に入れることはほとんどないのである。

## 5．両村の比較

スンガイブロア村とスンガイサヤップ村は，ほぼ同時期に JHEOA に

よって「再居住計画」の一環として設立されたが，資源利用や生業活動には大きな違いが見られる。スンガイブロア村では，その生計をもっぱら香木や籐などの森林産物に依存しているのに対し，スンガイサヤップ村は，ゴム園やアブラヤシ農園という開発に包摂され，森林産物はそれほど重要な意味を持ってはいない（表8）。

こうした開発への関わりの違いはどこからくるのだろうか。「再居住計画」は，もともと別のコミュニティで生活していたグループを，経済開発プロジェクトに参加させるため，同じ定住集落に移住させることを目的としていた。そのため，スンガイブロア村のように，異なる言語を話すグループが一つの村で暮らすことにもなる。それぞれの村が設立された当時の話を聞いていると，スンガイサヤップ村では，かつては100人ほどの人々が生活していたようである。設立当時は，ゴム樹液採集の他，近くの森林での籐採集も行っていたが，吹き矢による狩猟は定住後すぐに行われなくなった。集落が設立されてからしばらく後に，ゴム樹液採集や農耕を嫌う人々は村を離れ，スンガイブロア村やクランタン州のバテッの集落へと移り住んでいった。クランタン州のバテッグループは，当初「再居住計画」のもとに設立された二つの定住集落で暮らしていたが，定住と開発プロジェクトを嫌う人々は，村を離れ，森の中を移動するというかつての暮らしを続けるようになった(写真10)（Endicott, 1979；1984)。現在でも，彼

**表8　二つの村の比較**

| | スンガイブロア村 | スンガイサヤップ村 |
|---|---|---|
| 設立年 | 1977 | 1974 |
| 言語集団 | Semaq Beri, Batek De | Batek Teq |
| 人口 | 300(男：148，女：152) | 27(男：12，女：15) |
| 世帯数 | 60 | 6 |
| アブラヤシ農園の設立年 | 1993 | 1991 |
| アブラヤシ農園の面積（ha） | 59.73 | 87.36 |
| アブラヤシ農園からの分配金 | RM 200-300 | RM 2,000-3,000 |
| ゴム園の設立年 | － | 1976 |
| ゴム園の面積（acre） | － | 21 |
| 世帯毎の畑の面積（acre） | － | 2 |

**写真 10　森の中で暮らすグループ（クランタン州クアラコー周辺）**

らの一部は，主として狩猟・採集・漁労によって食料を入手し，森林産物の交易で現金収入を得ている。つまり，スンガイサヤップ村に残ったのは，開発プロジェクトや定住を素直に受け入れた人々なのである。

一方，スンガイブロア村では，異なる言語集団であるバテッ・デとスマッ・ブリが共住するようになった。彼らは，ともにトレンガヌ・クランタン・パハンにまたがる山岳地帯を生活域として，狩猟・漁労・採集活動と森林産物の交易を組み合わせた暮らしをしており，もともと顔見知りであったため，再居住による混乱は起こらなかったようである。スンガイブロア村の位置する場所はトレンガヌ川を堰き止めて作られたクンニャー湖の近くであり，村が建設された 1977 年にはすでにダムと水力発電所建設が計画されていた。ダムの建設は 1978 年に着工され，1985 年に完成した。ダムによって水没した地域は，村人がかつて狩猟・採集・漁労に利用していた地域であり，定住後も引き続き活動域となっていた（Kuchikura, 1987；口蔵，1998）。村人は，移住した当初，村の周辺に焼き畑を作り，コメ，トウモロコシ，サツマイモ，バナナ等を植えたが，それほど熱心に農耕に携わってはいなかった。それよりもむしろ，涼しい森の中での暮らしを好んだようである。しかし，ダムの完成により，活動域のかなりの地域が水没し，彼らの活動範囲が狭まることになった。すでに，ダム建設が計画され，

周囲の森林が水没することがわかっていながら，現在の場所に集落を作った政府やオランアスリ局への不信感は根強く残った。彼らは，開発に背を向け，かろうじて残った森林に生活の糧を求めている。こうした指向性は，他の「再居住」集落に暮らす，開発にあまり関わりたくない人々を引きつけるようになった。設立当初およそ14世帯60人であった人口は，移住者の増加や自然増により，現在ではおよそ60世帯300人に増加している。移住者はスンガイサヤップ村の他，パハン州のスマッ・ブリ集落からもやってきている。

設立以降の経緯に加え，FELCRAからの分配金の違いも村人の開発への態度に影響を与えている。人口が多く一人あたりの作付面積が少ないスンガイブロア村の分配金は，スンガイサヤップ村の十分の一に過ぎない。スンガイブロア村の住民は，しばしばFELCRAからの分配金の少なさに不満を述べるが，こうした感情が開発への関わりに影響を与えているともいえる。いっぽう，スンガイサヤップ村の住民は開発から十分な利益を得ており，積極的に開発に関わっている。結果として，スンガイブロア村では安定した現金収入源なしに貨幣経済に飲み込まれることとなった。かれらは，十分な森林産物を採集することができなかった時や，その価格が低下した時には，おおきな困難に直面することとなる。

いっぽうで，スンガイサヤップ村にも問題は残っている。開発への関わりを強めることは，モノカルチャー経済に依存することを意味し，経済の柔軟性を失わせることにつながる。両村の状況はコインの裏表の関係にあるといえよう。開発への関わりを強めることは経済の自立性を失わせることであり，開発に背を向けることは安定した収入源を捨てることでもある。いずれにせよ，開発は彼らの生活と経済に大きなインパクトを与えることとなった。今後とも，彼らと開発との関わり，そして，その生活への影響を注意深く見詰め続けていく必要があろう。

## 〈注〉

1）本論のもとになった調査のうち，2001年度から2004年度に関しては，日本

学術振興会科学研究費補助金「東南アジア・オセアニアの地域開発が環境と住民に及ぼす影響に関する生態人類学的調査」(代表者：口蔵幸雄)によって，また，2007 年度に関しては，2007 年度北海学園大学在外研修制度によって可能となったものである。また，オランアスリ局及び総理府経済計画局から調査許可を与えられた。それぞれの機関に感謝を申し上げたい。

2）村名のうち，「スンガイ（sungai)」とはマレー語で川を意味する。JHEOA によって設立されたオランアスリの集落は，河川の近くに位置することが多く，村名はその河川の名前がそのまま付けられることが多い。

3）マレーシア連邦憲法第 160 条では，マレー人を「イスラームを信仰し，日常的にマレー語を話し，マレー人の慣習法に従う者のこと」と定義している。したがって，非モスリムはマレー人とは見なされない。

## 〈引用文献〉

Carey, I. (1976) *Orang Asli: The Aboriginal Tribes of Peninsular Malaysia*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.

Dentan, R., K. Endicott, A. G. Gomes and M. B. Hooker (1997) *Malaysia and the Original Peoples: A Case Study of the Impact of Development on Indigenous Peoples*. Boston: Allyn and Bacon.

Endicott, K. (1979) *Batek Negrito Religion: The World-View and Rituals of a Hunting and Gathering People of Peninsular Malaysia*. Claredon: Oxford University Press.

(1984) The Economy of the Batek of Malaysia: Annual and Historical Perspectives. *Research in Economic Anthropology* 6: 29-52.

Kuchikura, Y. (1987) Subsistence Ecology among Semaq Beri Hunter-Gatherers of Peninsular Malaysia. *Hokkaido Behavioral Science Report Series E*, No. 1. Sapporo: Hokkaido University Press.

口蔵幸雄（1997)「オランアスリの起源 ── マレー半島先住民の民族形成論の再検討」『岐阜大学地域科学部研究報告』1：143-169.

（1998）『吹矢と精霊』東京：東京大学出版会

信田敏宏（1999）「改宗と抵抗 ── マレーシアのオラン･アスリ社会におけるイスラーム化をめぐる一考察」『東南アジア研究』37(2)：257-296.

（2004）『周縁を生きる人びと ── オラン･アスリの開発とイスラーム化』京都：京都大学学術出版会

Ramle A. (1993) *Semaq Beri: Komuniti Orang Asli di Terengganu*. Terengganu: Kolej Agama Sultan Zainal Abidin.

Skeat, W. W. and C. O. Blagden (1906) *Pagan Races of the Malay Peninsula*. London: Macmillan.

Suda, K. (1994) Methods and Problems in Time Allocation Studies. *Anthropological Science* 102: 13–22.

(2007) A Time Allocation Study on Subsistence Activities of the Batek in Terengganu. in Mohd. Zahedi D., Ramle A., Mat Atar M. T. and Mohad. Ali H. (eds) *Orang Asli Negeri Terengganu Warisan dan Pembangunan*. Kuala Terengganu: Penerbit Universiti Darul Iman Malaysia.

Williams-Hunt, P. D. R. (1952) *An Introduction to Malayan Aborigines*. Kuala Lumpur: Government Press.